慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森鷗外「小嶋宝素」伝補
Sub Title	A biography by Ogai-MORI : "Kojima-Hoso"
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.355- 378
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0355

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

森鷗外「小嶋宝素」伝補

高橋　智

一　序　言

鷗外が「嚼蠟の文を笑はれても好い」としてこの史伝を著されたお蔭で、図書学を学ぶ者にとって大変重要な人のことが埋没しなかった。その令弟森潤三郎も亦「多紀氏の事蹟」にこの人を載せ、更に長沢規矩也「経籍訪古志考」「日本書誌学史」阿部隆一「中国訪書志」等の研究に取り挙げられて、随分とその図書学に寄与した功績を知ることができるようになった。してみれば著作を残さず鈔書と校讐と蒐書に力を用いた樸学の小島氏を、却って鷗外の「嚼蠟の文」が見事に伝えていたと言えようか。曰く。「学者の伝記は細かに日常生活を叙する」ことである、と。今ここに捜索し得た資料を整理、これまでの研究を補して小島氏の学問を顕彰し、併せて鷗外の伝記を読む者の一助たらんと欲するものである。

ここに言う小島氏とは宝素（名尚質字学古通称春庵、太素経を獲て宝素―葆素とも―と号したという―鷗外「伊沢蘭

軒」九十一)、その嗣子抱沖(名尚真通称春沂、抱沖は字)、抱沖が弟瞻淇(名尚絅—裟又頴とも—通称春澳、瞻淇は字)を指して言う。

二　小島氏の学問

医術を以て家学となす小島氏の学問が、医籍の研究に中心が据えられたものであった(「東洋医学善本叢書」東洋医学研究会・一九八一年の解題等を参照)ことは言うまでもないが、ここでは、その医籍を中心とした図書学上に於ける意義について言及したい。そもそも、小島宝素という名が聞えるようになったのは、経籍訪古志によるものであることは鷗外の述べられる如くである。森枳園のその序に拠れば、狩谷棭斎在世時業起って、宝素これに与るという。無論、この業は今に言う文物としての古籍文献整理を企図した学術的為事であったわけであるが、この頃から恐らく宝素の脳中には、壮大な文献目録の構想が練られていたものと思われる。宝素の学をよく受け継いだ嗣子抱沖の編に係る、古巻聞見録並びに医籍著録の二書を以てみれば、何人もよくこの想像を否定し得ぬであろう。この構想は、図書学の発展した今にして尚遂げ得ぬ難事であり、難事であるが故に人のよくなし得ぬところである。図書学に志す者として、あらためて襟を正さなければならぬ思いがする。小島氏の学問の大きな意義がここにある所以である。

古巻聞巻録は大東急記念文庫蔵。上下二巻に分ち、経史が上、子集を下巻とし、医籍は除かれる。巻頭に古巻聞見録巻上経史と題し、次行に尚真著録とあり、以下経部、易類とそれぞれ改行して部類を示し、

周易

宋二體石経嘉祐二年刊石本出孫氏祠堂書目

周易王弼注六巻

古抄本 求古楼蔵五冊巻一欠七行十六字巻末誓誓ノ二字アリ明応

又 同上一二三四九行十七字三冊裏用朝鮮花紋表紙 永正五六八行十八字

の如く書名、一格を低してテキスト名を録し、現蔵者、行字数、刊写年等を小字双行で加え、時に応じて補訂を施している。単辺の桝目刷罫（十一行二十字）を用い、上下各々六十五丁である。首に附する目録によれば、凡そ二百数十種に及ぶ漢籍についての著録がある。各巻首に尚真／校定の印記を捺し、題簽には古巻聞見録と墨書。茶色表紙の半紙本一冊。全て抱沖小島尚真の自筆に係る。即ち、現存漢籍のテキストを網羅的に整理しようと試みた総目録で、惜しい哉、未完成のノートとして残ってしまったが、その内容は、それまでに全く類例をみなかった編纂物であると言ってよかろう。無論、伝本の多は経籍訪古志に勝る。小島氏は、本稿を元にして更に完全なる伝本書目を目指し、各テキストの源流優劣を極めんと欲したことであろう。かくして小島宝素の幕末考証学諸家に与えた影響は、訪古志によって窺い知ることができるけれども、抱沖の目録学に於ける実力も亦、若くして端倪すべからざるものを有していたのである。やや詮索を逞しくするならば、嘉永四年に編纂の成っていた本書は、翌年頃に編輯されたとみられる経籍訪古志一書に、大きな力を与えたとも考えられる。ここに一の例を挙げて参考に附することとする。書式は便宜上小字を用いない。

韓文

宋槧本 （訪古志所載）

崇 題昌黎先生文集本集四十巻外集十巻全八冊序首題門人李漢編并序文録序天水趙徳年譜跋元豊七年十一月十三日汲郡呂大防記毎巻有金沢文庫印（崇＝崇蘭館）

旧板五百家注本　（訪古志所載）
与旧板柳文同種
活板五百家注本　（訪古志不載）
明刊宋寥氏東雅堂本　（訪古志所載）
嘉靖中刊□□四十巻外集十巻
元槧本　（訪古志所載）
四十一巻　求　題晦庵朱先生考異留耕王先生音釈朱序後至元辛巳日新書堂重刊雲林院蔵書ノ印アリ（求＝求古楼）
明刊本　（訪古志所載）
題朱文公校昌黎先生集留畊王先生音釈蓋依至元本重刊者　慊堂蔵有闕巻
朝鮮国刊本　（訪古志所載）
考異本
皇朝刊本　（訪古志未載）
考異本
明正徳刊本　（訪古志未載）
無注　元光林寺蔵後移求誨堂
宋刊本
二通　琳（琳＝天禄琳琅書目）

この例に据ってみても、古巻聞見録に経籍訪古志の素型を見る思いがするのであるが、とまれ強調するべきは両書の関係如何に非ずして、宝素抱沖の、この体例の目録の完成、ひいては目録学を確立せんとした鴻志なのである。この功は医籍にあってなお亦顕彰されるべきで、多紀氏に於けるのとそれは同列である。その医籍著録二冊はやはり小島尚真抱沖の自筆に係り、台北故宮博物院蔵。解説は「中国訪書志」を参照。劈頭、素問の項を挙げて前賢の気迫を感ずるの資としよう。

素問

単経

明呉悌刊本　医庠□行□字巻首署巡按直隷監察御史金谿呉悌校十三字此本十二巻本ニ据テ経文ヲ録出スルモノ嘉靖本ナリ柳沿手跋アリ巻首功同良相ノ木葉形ノ一印アリ（医庠＝医学館）

又　懐仙楼　徂徠翁手沢藍批評語アリ

又　高階　又　吉□□

活字板　医庠□行□字缺一巻至四巻　又十二巻ニヨル

坊刊本　□行□字後人強テ九巻ノ旧数ニ分ツモノ格外類経ノ見出シアリ

次注

廿四巻本

明代翻彫宋本　毎巻末附音釈板心刊手名氏不記刊行歳月　東井文庫静然之印二印アリ　東井文庫旧蔵医庠　高七寸強幅五寸二分十行廿字注三十字巻中闕葉アリ　柳沿文稿中載スル所ノ本ナリ翻宋本中ノ最善ナルモノ他本其比ナシ初

明ノ刊本ナラン伊沢柏軒亦此本ヲ蔵ス帋刻稍劣

又　楓　諸ノ偽印アリ（楓＝楓山官庫）

明嘉靖庚戌顧従徳重彫宋本　行款□前ニ同シ巻首題言アリ巻末ニ明修職郎直聖□殿太医院御医上□顧定芳校ノ一行アリ松江府志及秦漢印後学顧氏世系履歴可考

明代坊刊宋本　医庠　行款体式前ニ同シ梓行ノ年月ナシ

明呉勉学重彫顧従徳宋本　正脈中ニアリ巻首顧氏ノ題言尚存ス王氷序後明新安呉勉学重校梓ノ一行アリ板心文字多削却

古抄本　毎巻重彫補注ト題ス釈音各章ノ下ニ移ス四五百年外ノ古抄ナリヲコト点アリ文字頗佳宋本ノ誤ヲ正スニタル村井椿寿ノ旧蔵天保癸卯ソノ子玄済献ス今医庠ニアリ南宋本ヲ重抄シタルモノナラン高六寸八分径四寸六分八行廿字注双行十八巻ノ末ニ題ス假承務郎□医学録臣趙叔度校正軍器庫副使兼翰林医官臣盧徳誠校正トアリ

古抄本　家

潘之恒黄海本　有闕昌平佐伯旧蔵　依坊刊宋本俗刻ナリ

明周曰校刊本　医庠　万暦甲申刊似以坊刊宋本為原尾府　柳原

活字刊本　柳原　皇国二百年前据周本

寛文三年刊本　据周本此本呉勉学熊宗立二氏ノ名ヲ題ス書估ノ伎倆非周氏ノ旧

十二巻本

元槧本　□行□字総目ノ首木記アリ目録ノ末ニ元本二十四巻今併為一十二巻刊行トアリ十二巻ノ末ニ至元己卯菖蒲古

林書堂新刊トアリ霊枢及ヒ遺篇運気論奥ノ二種ヲ附刊ス毎篇末附釈音　公忠／鄭氏／書府　妙覚寺常什□□　妙覚寺常住日典コノ三印アリ　盛方院ノ印アリ

熊宗立種徳堂本

元板ニ据テ重彫スルモノ成化甲午ノ刊本ナリ伊沢蔵蘭軒手跋アリ音釈補遺一巻運気図括定局立成一巻ヲ附ス

重彫熊氏本　医庠　明代仿刊熊本ナリ此類数通アリ皆悪本ナリ

趙府居敬堂本　医庠□行□字大板大字元板ニ据テ刻スルモノ巻首白雲及ヒ東魯唐中ノ二印アリ毎版心趙府居敬堂ノ五字ヲ刊ス嘉靖本ナリ板式六子全書ニ似タリ遺篇ヲ附ス

朝鮮活字板　存一之三十一之十二　二冊高六寸七分径五寸弱十二行廿一字此本韓人十二巻本ニ据テ□印スルモノ昏刻鮮朗巻首桂林一枝　韓山季林　漢浜砕夢ノ三印アリ冊上韓人ノ書ニテ見事ナリ

又　家蔵零本存一二三四五十一十二　三冊

又　崇　五六補写　附運気論奥

是を以て観れば、本書の有用なることは言うを俟たず、遺業としてこの業の完遂を期さぬわけにはゆかぬ思いを新にする。本稿も亦経籍訪古志成立以前の編に係るものであろう。稿中柳沛文稿と謂うは多紀元胤の医籍考（台北故宮蔵）を指そう。附言するならば、こうしたテキスト別著録の学は中国でも呂亭知見伝本書目や増訂四庫簡明目録標注という成果がみられたが、時の学者が互いに資料を見せ合って協作した状況が、日中さ程時を距てずしてあったのが興味深い。

また、小島氏の学問が以上のような目録学に長じたものであったのみではなく、諸書を自ら鈔して秘蔵することなく、更に諸本を校讐して是を求むる学に意を用いた事は識語編年に据って知れる所であるが、とりわけ陶弘景本草経集注の

復原が、医籍著録に家大人採輯本とある如く、宝素以来の為事として抱沖の時、稿本（国会図書館蔵）に仕上げられた業績は無視するわけにはいかない。小島氏を中心とした本草文献学については森鹿三「新修本草と小島宝素」（東方学報・昭和一五年）に詳細。又、圖書寮叢刊「新修本草　残巻」（昭和五八年）を参照。

いずれにしても宝素の著述は残らない。森枳園が重鈔した河清寓記一冊（国会図書館蔵）と自筆の古刻旧鈔目録五葉（大東急記念文庫）をみるのみ。前者は京都に於ける天保十三年の訪書行、後者は昌平学蔵の史部善本の解題著録十五点。両者残篇ながら経籍訪古志成立に提供した資料を思わしめるものがある。

三　小島氏識語編年

ここに、索めうる小島氏旧蔵書の識語を年代順に排して、読書校書の事蹟の一端をたどる為の資としたい。あらわれる書名は後の旧蔵書目録を参照していただき、紙面の都合上跋文の詳細な注釈や図書の解説には及べぬが、それは、「中国訪書志」等に明らかなものが多い。従って単なる識語の羅列に過ぎないが、特に交往あって密接な多紀氏、伊沢氏、渋江氏等の歿年は、これを加えて参攷に附した。鷗外の伝記をもとに通覧するならば、幾許かの収穫もあろうかと期する次第である。

文化十三年丙子　宝素二十歳

十一月、釈名疏証に識語がある。巻末には「攷古齋蔵。」又巻三末に「此本。向介伊憺甫。属一士人鈔写。分為三冊。其第一冊。被張恭庭持去。恭庭歿後。松屏書楼蕩為灰燼。而其本亦俱為烏有。今新補写合装。以蔵于家焉。」

文政三年庚辰　宝素二十四歳

十月に開元天宝遺事を得て末尾に識す。「右開元天宝遺事三巻。為尚古堂蔵本。庚辰小春乞而得之。坊本欠陸跋。是従宋槧善本伝鈔者。宜須珍惜也。質誌。」

文政四年辛巳　宝素二十五歳

四月六日。釈名疏証巻四末に識語あり。「四月二日。被擢為直医。後六日宿于西城直舎。夜半読過。小島質燈下記。」

七月十日に続釈名の末に識す。「読完。是日侍于経筵。聴林鵞講魯論。源質記于直舎。」

文政九年丙戌　宝素三十歳

八月十四日。市野迷庵歿。享年六十二。

文政十年丁亥　宝素三十一歳

六月二日。多紀柳沿（元胤）歿。享年四十七。

文政十一年戊子　宝素三十二歳

五月十二日。八史経籍志を得て末尾に識す「蔵於攷古斎。」

文政十二年己丑　宝素三十三歳

三月十七日。伊沢蘭軒歿。享年五十三。九月二十九日。籠三郎（抱沖）が生まれる。この月に尾張浅井氏が有毒草本図説一本を贈る。手跋にいう。「尾張儒医。浅井亮甫正翼見贈。質記。」

天保元年庚寅　宝素三十四歳

博物志の識語。「中秋。日直。宿於柳営。腹痛至暁。吐瀉。頓覚疲極。乗轎退出。明日稍快。扶病読半巻。十八日。哺読完。併加校語。小島質記于宝素堂中。」

天保二年辛卯　宝素三十五歳

十月六日。宋史藝文志（八史經籍志）の識語にいう。「夜半聴雨。読此巻。時加句批了。」宝素堂蔵書目録にいう「冬月。遣杉本久徴於尾張国。就浅井正封伝鈔本。伝録黄帝内経太素。是書爲仁安中。丹波頼基所書写。原軸爲仁和寺所伝蔵。」

天保五年甲午　宝素三十八歳

七月二十一日。漢書藝文志（八史經籍志）の識語にいう。「与岡本況斎同従明注文盛高濂傳汝舟同校本。審校。兼対琴川毛氏刊本一掃。是年重八。早起。覆校。質。」十一月三日。隋書経籍志（八史経籍志）巻二末に識す。「照明南雍刊本。与岡本況斎同校。是日。津島彦逸自越中来。又相与対読。質識。」十一月十八日。隋書経籍志巻三の末に識す。「校。質。」

天保六年乙未　宝素三十九歳

四月。清嘉慶九年黄丕烈の博物志跋文を補鈔する。その識語にいう。「据昌平庠蔵本。補此一頁。初二行手鈔。時有客至。友人渋江籀斎。為予代書。」この時に抽斎は三十一歳。閏七月四日。狩谷棭斎歿。享年六十有一。このころ、居家必要事類全集を補修して識語にいう。「孟秋月。重加背装。楓園道人。為予手造。佞宋志。」九月。葛仙翁肘後備急方を購得して巻末に記す。「購蔵。」

天保九年戊戌　宝素四十二歳

五月二十七日。影宋鈔本斉民要術巻五を校する。その末に識す。「著雍淹茂。夏五二十七日夜。手校畢。弟子洚島債対読。」

天保十年己亥　宝素四十三歳

籠四郎生まれる。名瞻淇。

天保十一年庚子　宝素四十四歳

十月。難経本義の末に識す。「桜寧生此注。余曩蔵東宜帆井原刊。而是則重刻活字本也。庚子小春。挙以贈。津島彦逸者。道救之後嗣也。小島質。」

天保十二年辛丑　宝素四十五歳

二月十四日。明刊斉民要術巻一に識す。「二月望前一日。照金沢影宋本校。伊沢朴甫。渋江道純。同勘。質。」又巻一末に跋す。「二月望前一夕読。案。師古注文。当是後人妄添蛇足耳。」巻五の首の識語は、「此春。以日本高山寺宋本較。」また、影宋鈔斉民要術巻八末に跋す。「紹興甲子。葛祐子刊此書。後序有言曰。蓋此書。乃天聖中崇文院板本。非朝庭要人。不可得。案。斯刻。通字欠末筆。審是天聖刊本也。辛丑。花朝前一夕。秉燭。以識焉。佞宋。」十月一日。古活字版孟子を購得す。識語にいう。「購授兒沂。是日。得宋槧本昝節度経效産宝三巻。併記志喜。質題。」この月又、太医院纂急救新刊諸症を購得して末に「購蔵。質」と署名する。

天保一三年壬寅　宝素四十六歳

この歳新雕入篆説文正字に跋す。跋にいう。「右此書。巻末一印。文字隠然。殆不可辨。照北宋本通典所捺。始得可読焉。案。朝鮮史略。辛巳為粛宗六年也。巻首経筵印。又見北宋本御注孝経及文中子。是亦高麗国印也。天保壬寅。仲秋。借録已畢。造匣以還。併題。質。」九月二十八日。河清寓記一巻の序を記していう。「福井大医博士崇蘭館。多儲古書。楊上善太素。亦其一也。劉教諭元胤奕祺。其弟元堅萱庭。皆能伝録秘本。余亦曽得重鈔其一二。而為宝焉。今

秋。奉教西上。公暇相訪得交。督於一堂之上。辨論方薬。兼継覧其所儲皇国古巻及宋元之刊本。可不謂幸哉。亡友狩谷望之謂。牙籤万軸。富踰鄴架。真不誣也。」河清寓記の、年月が明らかな事蹟を示せば次の如し。「十月二十四日。於仁和寺宮御室。賜拝覧医心方。黄帝内経太素。二十□日。与浦埜保生院。同観百〻陸奥守蔵書。十一月十七日。拝覧粟田青蓮院宮御宝蔵。十八日。借鈔畑家蔵孫用和秘方嗣書。十二月三日。尾張儒医浅井氏。携訪真福寺経蔵典籍。」

天保十四年癸卯　宝素四十七歳　抱沖一五歳

三月。宝素、太平恵民和剤局方に識す。「褙補塡蝕字。」十一月十四日。新修本草巻第十三を校す。「一校華。質。」十一月二十六日。巻第一四を校す。「一校了。質。」またこの年、抱沖、淮南鴻烈解を校読し、以下の跋文あり。五月下浣。巻二末に「照道蔵本。句読一過。是正誤刊。沂誌于攷古斎南軒。」八月上浣。巻五末に「据荘逵吉所校道蔵本。是正誤刊。」巻六末に「据於荘逵吉所校刊道蔵本。是正誤刻了。沂誌於博愛堂中。時夜未央矣。」八月十二日。巻七末に「与道蔵本。対校了。沂誌。」八月二十七日。巻八末に「照道蔵本。是正誤刊。沂誌。」九月二十一日。巻九末に「与田沢周任。照荘逵吉校道蔵本。是正誤刊了。時在于練要楼中。春沂誌。」九月二十六日。巻十末に「照道蔵本。与周任。対読。沂識于攷古斎中。」巻十一末に「与田沢周任。対読。沂誌于攷古斎中。」閏九月上旬。巻十二末に「与田沢周任。対読。是正誤刊。沂誌。時在于練雲楼中。」十月上浣。巻十四末に「与周任。対読了。沂誌。時在于練要楼中。」巻十七末に「照道蔵本。与田沢親民。同校。沂。」十月十六日。巻十五末に「望後一日。読于攷古斎中。沂。」十一月十一日。巻十八末に「照道蔵本。与田沢親民。同校于練要楼中。沂。」十一月二十六日。巻二十末に「照道蔵本。与親民。同読于攷古斎中。沂。」十二月一日。巻二十一末に「据荘逵吉校刊道蔵本。与田沢親民周任。同校訖。時在于練要楼中。是日。残雪未消。寒気砭肌。沂。」

弘化元年甲辰　宝素四十八歳　抱沖十六歳

春月。宝素、医説を転写して、跋を識す。「重鈔高階典薬大允家蔵嘉靖二十二年刊本。以儲於医学之書庫焉。後学源尚質記。」四月二十一日。松崎慊堂歿。享年七十有四。夏。宝素、孫可之文集を読み末尾に識す。「読完。句以朱圈。蓋別先儒句読也。質識。」七月二十七日。新修本草巻第四を校して識す。「燈下照本草和名。一交了。質。」

弘化二年乙巳　宝素四十九歳　抱沖十七歳

秋。宝素、家蔵の元刊新編医方大成の巻三巻四を補鈔して後に識す。「借鈔平安典薬大允。高階真人経宣家蔵。明代改補元刊本。開巻題目大字。係後人改刊。巻末集字。猶是旧観也。余家所蔵本。与此本行款不同。則知元代刊不止一種而已。行観棊樵叟誌。」

弘化三年丙午　宝素五十歳　抱沖十八歳

正月。抱沖、座右筆記に題す。「座右筆記。樫蔭生尚真。」五月十二日。宝素は医学館の世話役となり学生の課題を添削する。六月。中風閉脱辨を批す。七月。傷寒方案を批す。

弘化四年丁未　宝素五十一歳　抱沖十九歳

十二月七日。宝素、新編医方大成巻八に室町期の旧題簽が貼附されているのに一言を識す。「是僅片帋。旧挿此巻中。装背時。工人截失中間。所可惜耳。聊取貼于茲。是所与寛正劄記筆跡相同。当是緇流所記者耶。丁未十二月七日識。質。」

嘉永元年戊申　宝素五十二歳　抱沖二十歳

十二月七日。宝素卒。

嘉永二年己酉　抱沖二十一歳

八月二十二日。本草経集注攷並びに本草経新定目録を編著して識す。「□□己酉。仲秋廿二日。校定卒業。尚真。」

嘉永三年庚戌　抱沖二十二歳

五月二十日。元禄十三年庚辰九月侍医分限記を移写して跋す。「右元禄中侍医分限記一巻。係養安院法印家所伝蔵。当時簿録也。頃之。従其□正健。借覧一過。巻中記。各医官位。姓名。蒙　擢歳月。俸禄。居宅。及年齢□父祖名等。頗詳。皆是以考当時医官事蹟。為吾三祖円斎君。年齢宅地家乗漏載。得此書。而始詳。近世諸家旧記。散逸多不伝。況為此冊。不啻為考医家存蹟之資。亦得拠以補正家記之誤脱。則雖僅之数頁。豈可不貴重哉。仍□自模録一過。以永蔵架中矣。原本筆法。端雅可愛。蓋正健祖先所手書云。円斎後人小島尚真識。」「吉益春庵已下三名。及巻中一二所改。倶是別筆。蓋庚辰以後襲記者也。亦佐様模録□。不混原書耳。尚真又識。」この歳に本草経集注を編纂する。三月六日。森枳園が同書稿本の巻三末に識していう。「校読于懐仙楼。小島尚真。田邨元深。堀河済。森立之。」八月二十一日。新修本草巻第十九末に抱沖が識す。「拠大観本草校讐。渋江全善。森立之対読。時在曲直瀬氏之懐僊楼。尚真。」九月一日。枳園が又本草経集注稿本巻七末に識していう。「以大全政和二本。並宋本。図注本草古本。新脩本草。対校終功。曲直瀬正貞。小島尚真。森立之等。」この時枳園は歳四十三。十月二十八日。旧唐書経籍志（八史経籍志）を読む。その末に識す。「以聞人沈二家。校刊本。訂正誤謬。尚真。」

嘉永四年辛亥　抱沖二十三歳

五月二十九日。史記扁鵲公列伝を読み、その末に識す。「句読一過。尚真識。」夏月。再び淮南鴻烈解を読み巻末に識す。「辛亥夏月。再読訖。尚真。」八月九日。古巻聞見録を鈔写し終えて末に識す。「書写卒業。尚真記。」九月二十七

日。明刊斉民要術を校す。識語にいう。「据宋本。訂正誤脱。宋本。高山寺所蔵。天聖原刊本也。尚真識。」

嘉永五年壬子　抱沖二十四歳

この歳、経籍訪古志編纂にあずかる。その初稿本に識す。「嘉永壬子歳。会緑汀薬院。賞観古刻旧鈔善本数種。併編輯此書。同輯者三人。渋江抽斎全善。森立夫立之。堀川舟庵済也。尚真亦与焉。」時に抽斎歳四十八。立夫四十五歳。十一月十六日。伊沢榛軒歿。享年四十九。

安政二年乙卯　抱沖二十七歳　瞻淇十七歳

四月十三日。抱沖が、古巻聞見録の末に識す。「釘装成。」十一月。抱沖、経籍訪古志初稿本に識す。「尚薬三松先生校閲。老儒海保漁邨読過加批評。此書通篇。係森立夫手書繕録。其功居多。安政二年仲冬。浄写此書第三稿時書。源尚真記。」この歳、多紀藍庭六十一歳。海保漁邨五十八歳。十二月。異疾志を読む。識語にいう。「乙卯臘月。仮医学本。俾弟瞻淇騰録。原本。従王文誥唐代叢書。所摘出也。是月十一日。対校一過。句逗。尚真。」

安政三年丙辰　抱沖二十八歳　瞻淇十八歳

二月。抱沖、古巻聞見録目録末に識す。「右門類。仿清四庫全書例録。弁巻頭。丙辰仲春。補訂是冊。時記。樫蔭斎主人。」十月十九日。抱沖、八史経籍史の漢書藝文志を校す。その末に識す。「依高似孫子略所引。校正。尚真。」十月十一日。抱沖、洗冤録に跋を書く。跋にいう。「此本不分巻数。始条令。終験状説。凡五十四篇。巻端自序題銜。一与竹汀之言符。今行本分四巻。以此校之。篇題文句。亦大不同。益知今本頗有後来増損。而此尚存宋氏原第者。但篇中間有依平冤無冤二書附録者。及巻首頒降新例六条。並元代重修所増。非宋氏之旧也。燈下書。尚真。」

安政四年丁巳　抱沖二十九歳　瞻淇十九歳

二月十四日。多紀藍庭（元堅）歿。享年六十有三。閏五月八日。抱沖歿。二十三日。森約之、経籍訪古志の森立之約之補注本の巻六末に跋す。跋文にいう。「夫此訪古志。今年之春。小島春沂君。及堀川舟庵二人脱稿。而此書其脱稿後。伝写之尤初者也。儒医共是太氏家大人作草藁矣。附録二巻在後。通計八巻也。梖庭尻士森約之書。」「本篇儒部六巻。悉春沂君書。附録医部二巻。共舟庵書也。是原本之事也。同日約之又書。」十月二十七日。多紀曉湖（元昕）歿。享年五十有三。

安政五年戊午　瞻淇二十歳

八月二十九日。渋江抽斎歿。享年五十四。

安政六年己未　瞻淇二十一歳

十月一日。孫可之文集を読み、末に識す。「据海保漁村翁読本。与広瀬仁卿仝校。第七巻已下。旧無句逗。今亦以圈点。別之於先儒云。葆素後人瞻淇。」十一月二十七日。唐劉蛻集を読む。識語にいう。「拠海保漁村有読本。句逗卒業。朱圈別于先儒也。瞻淇誌。」この歳、漁村六十二歳。

文久元年辛酉　瞻淇二十三歳

七月十九日。伊沢柏軒歿。享年五十四。

文久三年癸亥　瞻淇二十五歳

九月三日。多紀棠辺（元佶）歿。享年三十九。

慶応二年丙寅　瞻淇二十八歳

九月十八日。海保漁村歿。享年六十有九。

明治三年庚午　瞻淇三十二歳

秋日。開元天宝遺事を校して跋を識す。「唐代叢書所収本。無自序陸跋。巻不分上下。体裁自下。而文字互有得失。此本所非者。多属誤写。家君為宋槧善本伝鈔者。真不誣。明治庚午秋日校了書。菉湾生尚絅。」この歳の冬。経籍訪古志伝鈔本に補注を加える。十月。その詩人玉屑の項に補注していう。「奈須玄竹老人家蔵正中本玉屑。庚午十月観。尚裴。」冬日。その説文正字の項に補注を加える。「此本明治庚午冬日。得之懐仙後人筐底。有先君宝素先生借読題記云。（天保十三年参照。ここでは略す）据此。則訪古志著録之時。誤読題語耳。」又、嘉靖刊太玄経の項に補注を加えて云う。「得懐仙楼旧蔵本。細玩巻中。玄桓貞徴等字闕筆。蓋覆刻宋本也。但毎巻首明郝梁子高校刊七字。字体自異。嘉靖時補刻也。述玄一篇。冠第一巻首。」十二月三十一日。文中子の項に補注して云う。「観文中子於樋趨古家。無高麗国十四葉印。」

明治四年辛未　瞻淇三十三歳

春日。潛穎録を読んで末に識す。「劉蓋庭先生。少時。手鈔潛穎録。假之樋口趨古。課児尚能鈔之。硃筆一過。辛未春日。寝疾蓐中書。尚絅。」「原本誤写居多。往往至不可読。俟佗日得善本。而再校。又識。」十一月十二日。釈名疏証を校し巻一末に識す。「照呂刻本一校。尚絅。十一月二十三日。同書巻四に識す。「据呂仲木本。硃筆校読了。小島尚絅識。」十一月二十四日。同書巻七に識す。「校了。菉湾尚絅。」又、巻八にも識す。「照家蔵明呂仲木刊本。一校了。尚絅鐙下書。」又、続釈名の末にも識す。「夜読于攷古斎鐙下。不肖孤尚絅。」十二月十九日。文館詞林盛事を移写して後に跋す。「慶応丙寅三月。森立夫齋来此書見示。当時匆忙不暇鈔写。爾後。荏苒超□不果。今茲偶訪文部権助（権助二字後訂作編輯）木村正辞。談及是事。遂借還（此後補其原稿三字）。手写二日而竣功。伝照原稿本一校了。明治四年辛

未。嘉平月十九日棊湾小島尚絅識于攷古斎。」

明治九年丙子　瞻淇三十八歳

一月四日。多紀雲従（元琰）歿。享年五十三。

明治十一年戊寅　瞻淇四十歳

十一月三日。再び潛顕録を読む。識語にいう。「明治戊寅。天長節。与旗山老友。対読。裟。」

明治十二年巳卯　瞻淇四十一歳

この歳倭名類聚鈔国郡部を校す。三月。その末に識していう。「据家蔵元和活字本縮写。尚顕。」三月三十日。巻五末に識す。「照延喜式一校。尚顕。」巻九末にいう。「校（朱筆）。同夜校（黄筆）。」四月下浣。巻五末に識す。「以拾芥抄一校。」五月十五日。又巻五末に識す。「燈下。海東諸国記比校了。」五月二十六日。又巻五末に識す。「据寧海塚本君手校本。加藍筆了。」五月三十日。巻六末に識す。「借寧海塚君本。抄其考語。雨窓。燈下記。尚顕。」六月廿六日。巻七末に識す。「功了。」七月十日。巻八末に識す。「卒業。」九月三十日。巻九末に識す。「据冢本氏校本。藍筆一過。鐙下誌。尚裟。」この歳、塚本寧海は四十七歳。

明治十三年庚辰　瞻淇四十二歳

六月一日。倭名類聚鈔国郡部を校し巻六末に識す。「尚絅。」六月八日。巻七末にいう。「病間卒業。」六月九日。巻八末にいう。「標記了。」六月十日。巻五末に識す。「伊呂波字類抄一校。」又巻九末に識す。「据輪池屋代翁手校本塙氏所蔵。抄其標記。」十二月五日。瞻淇歿。

［未考年手跋］

「背装成。其□□入邢疏於皇疏之末。属後人添足。非旧観也。諸者勿怪諸。質題。」（某年八月十六日。論語義疏。）

「課児沂。照旧差。審校。」（荘子景高山寺本鈔本）

「蘭軒子見贈。」（太平恵民和剤局方指南総論）

「案。此本毎巻大字。似後人改補。則知旧本必是集字。然未録宣明抜粋諸方。猶在于彦明重修之前。必矣。野樵溪白雲続蔵。及福榕亭崇蘭堂本。皆題新編南北経験医方大成。而毎門末有宣明瑞竹抜粋諸方者。則熊彦明所加也。又案。序文及目録前木記中大字。亦係後人補改。」（新編医方大成）

「右講談所蔵書目録上下篇。借伊賀守源朝臣正路蔵本。嘱鈴木蔀謄録。挿架上焉。小島質記。」（和学講談所蔵書目録）

四　小島氏の蔵書

宝素堂蔵書の富は経籍訪古志に据って直ちに知ることができるが、その医籍のほぼ全貌は枳園の子森約之の謄写に係る抱沖編宝素堂蔵書目録（国会図書館蔵）に詳らかである。医経は四、経方十三、本草三、雑集三、叢書に分ち、外編に記伝、書目の医関係書のみを著録する。半面十行の刷罫紙が五十二丁。明治中、その多くは楊守敬に帰し、現に台北故宮博物院に蔵される。「中国訪書志」参照。併せその他に散在する現存旧蔵本をここに輯録する。宮内庁書陵部、内閣文庫、国会図書館、お茶の水図書館成簣堂文庫、大東急記念文庫、東洋文庫、都立中央図書館、慶応義塾図書館、斯道文庫の各所に確認される。小島氏の印記、識語、森志（経籍訪古志）著録の有無、大きさ、冊数を記した。勿論氷山の一角である。しかし今、これより以上を知るすべがない。調査に御協力いただいた各機関には深甚の謝意を表したい。

經　部

周易六巻　魏王弼注　〔室町〕写　印森　大三　故宮

易伝一〇巻附易解附録　唐李鼎祚撰（附）漢鄭玄注　明胡震亨等校　人見竹洞旧蔵　印　唐大四　成賓

書［集伝音釈］六巻欠首目・巻五・巻六　宋蔡沈集伝　元鄒季友音釈　［元］刊　印森　唐中四　故宮

儀礼注疏一七巻　漢鄭玄注　唐陸徳明釈文　唐賈公彦疏　明汪文盛等編校　［明］刊　印森　唐大八　故宮

春秋経伝集解三〇巻　晋杜預撰　［慶長］刊古活字II—(ロ)　印　大一五　故宮

春秋別典一五巻　明薛虞畿　［江戸］写　印　大八　内閣

古文孝経欠孔序　旧題孔安国伝　［室町末］写　印　大一　故宮

孝経直解三巻欠巻二　［室町末］写　印森　大一　故宮

論語一〇巻欠巻九・十・札記　魏何晏集解　文化一三年序刊（市野光彦）覆正平版単跋本　尚質書入　印　大三　故宮

論語義疏一〇巻欠序・巻五・巻六　魏何晏集解　梁皇侃義疏　［室町］写　印識　大七　斯道

孟子一四巻存巻一—四　漢趙岐注　［室町］写　印　大二　故宮

孟子一四巻　漢趙岐注　［慶長］刊古活字二種　印識　大七　成賓

釈名疏証八巻補遺一巻続釈名一巻　清畢元撰　［江戸］小島尚質令写　尚絅手校　印識　大二　故宮

新雕入篆説文正字　北宋刊　印識森　唐大一　成賓

玉篇存水部　梁顧野王編　［江戸］写影石山寺蔵旧抄本　印　大一　故宮

経史通用古今直音四巻　明邵真人編　喩道純校　張道中重校　明成化九年序刊　印　唐大四　故宮

新板増広附音釈千字文註　梁周興嗣撰　不著注人　［南北朝］刊　印森　大一　故宮

古今韻会挙要三〇巻附礼部韻略七音三十六母通攷　元熊忠撰　朝鮮旧刊　印　韓大一〇　故宮

史　部

［史記］篇鵲公列伝　嘉永二年刊（存誠薬室）覆南宋黄善夫刊本　印識　大一　故宮
唐史論断三巻附録一巻　宋孫甫撰　［江戸］写　伝鈔宋端平刊本　印　大一　故宮
大唐六典三〇巻　唐玄宗撰　李林甫等奉勅注　明正徳一〇年序刊（蘇州　席書・李承勛）　印森　唐大六　故宮
新編方輿勝覧七〇巻首目一巻　宋祝穆撰　［宋末元初間建陽書坊］刊　印森　唐大二〇　故宮
安南志略二〇巻存一九巻　元黎崱撰　清写　清黄丕烈旧蔵　印森　唐大二　国会
八史経籍史　文政八年刊　官板　尚真尚質書入　印識　大一七　慶応

子部

劉向新序一〇巻　漢劉向撰　［明嘉靖二六年］刊（何良俊刊説苑新序合刻本）　印森　唐大三　故宮
洗冤録　宋宋慈撰　［明末］刊　印識森　唐大一　故宮
斉民要術一〇巻　後魏賈思勰撰　明胡震亨校　［明万暦］刊（秘冊彙刊本）　尚質尚真書入　印識　唐大六　故宮
同存巻一残・五・八　後魏賈思勰撰　［江戸］影写高山寺蔵北宋刊本　識　大一　故宮
大玄経一〇巻附説玄・釈文各一巻　漢揚雄撰　晋范望解賛（説）唐王涯撰（釈）［宋林瑀］撰　明嘉靖三年跋刊（郝梁校刊）　印　唐大二　故宮
五行大義存巻五　隋蕭吉　［江戸後期］影写高野山三宝院蔵鎌倉宝治鈔本　印森　大一　故宮
墨子六巻　明茅坤校閲　明万暦九年序刊（書林　童思泉）　印森　唐大六　故宮
淮南鴻烈解二一巻　漢劉安撰　高誘注　明張象賢校　［明］刊　尚真書入　島田篁邨旧蔵　印識　唐大一〇　成簀
［居家必要事類全集］存壬癸集二巻　元□□撰　［元］刊　印識森　唐半一　故宮
開元天宝遺事三巻　五代王仁裕撰　［江戸］写　印識森　大一　故宮
博物誌一〇巻　旧題晋張華撰　天保一年小島尚質写（伝鈔士礼居黄氏嘉慶刊景宋連江葉氏本）　印識　大一　故宮
潛穎録　明陳益祥　［江戸末］写（小島尚能）　尚絅書入　印識　半一　国会
初学記三〇巻欠巻一―六　唐徐堅等奉勅編　明嘉靖一三年刊（晋府虚益堂）翻安国桂坡館刊本　印森　唐大一〇　故宮
新編翰苑新書存前集四―十一・五十―七十・後集上十一―十九　後集下一―三・外集六―十　宋不著撰人　［宋末建陽書坊］刊　印森　唐半七　故宮
標題徐状元補注蒙求三巻　後晋李瀚撰　宋徐子光補注　［室町］写　有馬氏溯源堂旧蔵　印森　大三　故宮

重新点校附音増注蒙求三巻　後晋李瀚撰　宋徐子光補注　応安七年（1374）刊　印森　大一　国会

老子道経二巻　旧題河上公章句　［慶長］刊古活字　印森　大二　成簣

荘子（存庚桑二三・外物二六　寓言二七）　晋郭象注　［江戸］影写小島宝素旧蔵摹写高山寺蔵鎌倉鈔本　識森　三巻　故宮

纂図互注南華真経一〇巻（存巻八）　晋郭象注　唐陸徳明音義　［室町末近世初］写　印識　大一　故宮

集部

楚辞八巻（附楚辞弁証二巻）楚辞後語六巻　宋朱熹注　明万暦二五年刊（吉府）　山田広業旧蔵　印　唐大六　内閣

寒山子詩集（附豊干拾得詩）　唐釈寒山撰（附）釈豊干・釈拾得　［江戸］影写宋淳熙刊本　印　大一　故宮

新刊五百家註音辯唐柳先生文集四五巻　唐柳宗元撰　［宋魏仲挙］編　嘉慶元年（1387）兪良甫刊　印　大一一　東洋

五百家註音辯昌黎先生文集四〇巻　唐韓愈撰　［南北朝兪良甫］刊　印　大二〇　故宮

唐劉蛻集六巻　唐劉蛻撰　明呉馡編　明崇禎一六年序刊（閩中黄燁然）　印識森　唐大一　故宮

孫可之文集一〇巻　唐孫樵撰　明黄燁然校　［明崇禎］刊（黄燁然）　印識森　唐大一　故宮

新板増広附音釈文胡曽詩注三巻　唐胡曽撰　宋胡元質注　［江戸前期］写　印森　大一　故宮

蘇老泉全集一六巻　宋蘇洵撰　［江戸前期］写　印　大二　故宮

王状元集百家注分類東坡先生詩二五巻　宋蘇軾撰　王十朋編　宋刊　印識森唐大一三　書陵

西山先生真文忠公文章正宗（存巻一・二二三・二四）　宋真徳秀撰　［元末明初］刊覆宋　狩谷棭斎旧蔵　印森　唐半二　故宮

増広唐賢三体詩法三巻　宋周弼撰　元釈円至注斐庚増注　［室町末］刊覆明応三年刊阿佐井野版　印森　大三　故宮

医部

新刊補註釈文黄帝内経素問（存巻一―五十一・十二）　唐王氷注　宋林億等校　孫兆改誤　印森　韓大三　成簣

朝鮮刊　有補鈔（小島尚真）　渋江抽斎・曲直瀬氏旧蔵

難経本義二巻　元滑寿撰　元和三年八月刊（梅寿）古活字　印識　大二　成簣

新刊勿聴子俗解　八十一難経六巻図要一巻　明熊宗立撰　谷野一柏校点　天文五年刊（越前一乗谷日下宗淳）　印　大三　故宮

翻明成化八年熊氏中和堂刊本

異疾志　唐段成式撰　安政二年小島尚絅写　尚真書入　（唐代叢書本）　印識　大一　故宮
鍼灸資生経存巻一零巻　宋王執中撰　［室町］写　伝鈔金沢文庫本　印識　半一　故宮
同　七巻　同　［室町後期］写　伝鈔明正統一二年広勤書堂刊　印識　大四　故宮
銅人腧穴鍼灸図経三巻附穴腧部数一巻　宋王惟一撰　［明］刊　印　唐半二　内閣
新刊補註銅人腧穴鍼灸図経五巻　宋王惟一撰　金闕名注　朝鮮旧活字翻元崇化余氏勤有書堂刊本　印森　韓大五　故宮
察病指南三巻　宋施発撰　［室町中期］刊　印森　大一　故宮
葛仙翁肘後備急方八巻欠巻七・八　［晋葛洪］撰　［梁陶弘景］補　明万暦二年序刊　野間氏旧蔵　印識　唐大六　内閣
新編医方大成一〇巻巻三・四配鈔　元孫允賢編　［元］刊（［建安］鄭氏宗文書堂）　印識森　唐大九　故宮
医説一〇巻　宋張杲撰　明羅練鄧校　［江戸］写（一部小島尚質）影明嘉靖二二年序刊本　印識　大四　内閣
医門法律　清喩昌撰　清刊　印　唐大七　内閣
旅医宝鑑七巻　清安宗允撰　［江戸］写　多紀氏旧蔵　印　大四　内閣
保赤全書二巻　明管樺撰　龔居中補　呉文炳校　［明］刊　印　唐半一　内閣
太医院急救簒新刊諸症四巻　明呉文炳撰　［明］刊（余雲坡）　尚質書入　多紀氏旧蔵　印識　唐半一　内閣
太平恵民和剤局方存序目一巻・巻一―四七・八　宋陳師文等撰　許洪注　元刊　印識　唐大三　書陵
太平恵民和剤局方指南総論三巻　宋許洪撰　［元末明初間］刊　印識　唐大一　故宮
本草経［集注］七巻附本草経集注攷並新定目録（外題）　梁陶弘景撰（附）小島尚真編　稿本（尚真・森立之等）　印識　合大二　国会
新修本草残巻四・五・一一・一二・一三・二四一五・一七・一八・一九・二〇　唐季勣等奉勅撰　〔江戸末〕写　印識　大一〇　書陵
経史証類大観本草三一巻　宋唐慎微撰　［明前期］刊［明］修　覆元大徳六年宗文書院刊本　印　唐大二〇　故宮
嶺南衛生方三巻附新編嶺南衛生方附録　元釈継洪撰　明万暦四年序刊　曲直瀬氏多紀氏旧蔵　印　唐大一　内閣

国書

仲文章　［江戸］影写鎌倉旧鈔本　向山黄邨旧蔵　印　大一　故宮
下学集　闕名撰　［元和］頃刊　印　大一　東急
有毒草本図説二巻　清原重巨撰　文政一〇年一二月刊（永楽屋東四郎）　印識　大二　内閣

本草会物品目録附図　嘗百社編　天保六年三月刊（尾張　編者）　印　大一　内閣

和学講談所蔵書目録附同目録宸記家記　［江戸末］写（小島尚質令写）附岡本況斎令写　尚質書入　印識　大二　成簀

文館詞林盛事附武后制字攷補文館詞林見存目録補攷　［木村正辞］編　明治四年写（小島尚絅）　識　半一　都立

元禄十三年庚辰九月　侍医分限記　嘉永三年写（模写　小島尚真）　印識　大一　内閣

倭名類聚鈔存五巻（巻五―九）国郡部　源順撰　明治一二年写（小島尚絅）　尚絅書入　印識　大一　内閣

中風閉脱辨［医学館学生方案綴込］弘化三年　弘化三年写　小島尚質等手校本　大一　内閣

傷寒方案［医学館学生方案綴込］弘化三年　弘化三年写　小島尚質等手校本　大一　内閣

著作

河清寓記　小島尚質撰　［江戸末］写（森立之）　半一　国会

座右筆記　小島尚真撰　弘化三年写（自筆）　印　半一　故宮

宝素堂蔵書目録内編・附録（外題）宝素堂蔵医籍目録外編　小島尚真編　写（森約之）　半一　国会

医籍著録　小島尚真編　［江戸末］写（自筆）　半二　故宮

古巻聞見録二巻　小島尚真編　嘉永四年八月写（自筆）安政三年二月訂　尚絅補　印識　半一　東急

古刻旧鈔目録附杉田観梅紀行　小島尚質撰（附）小島尚絅撰　［江戸末］写（自筆）　印　半一　東急